

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心

No.591

どんな方法でもよい、己の間違いを人から直してもらおうように、心がけるべきである。
(蓮如)

△解説▽着物のほころび、欠けたボタン、口もとの飯粒、ズボンの開いた窓などを指摘されると、恥ずかしさからすぐに対応するように、己の間違いは、たとえ目下の者から教えられても、素直に直すように心掛けたい。己の欠点は茶碗の傷と同じで、見苦しい。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.6.30 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.593

言語はただこれ載道の器なり。
〔碧巖録〕
△解説▽もの道理を語るには言葉や文字が欠かせない。しかし言葉や文字では語り尽くせないところに突き当たる。そこは語るではなく、やってみせる、やらせるしかない。言語はただ道理を説明するための道具（載道の器）にすぎない。製品の説明書のように、理解し使えたら不要である。と言って文字や言葉を捨ててはならない。

田上太秀・駒澤大名教授

2017.7.2 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.592

花開く時、蝶来たる。蝶来たる時、花開く。我もまた人の心を知らず。人もまた我を知らず。互いに知らぬも自然の法に従う。
（良寛）
△解説▽良寛は自然法爾を詠んだ。万象は人為的な力を加えず、おのずからの姿のままであるという。花が咲き、蝶が来るのか、蝶が来て、花が咲くのか。互いに知らぬ者が交際するのはなぜか。言葉では語れない。

田上太秀・駒澤大名教授

2017.7.1 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.595

自己をはこびて方法を修証するを迷いとす。方法すすみて自己を修証するはさとりなり。
（道元）
△解説▽頂上を見ながら山に登る登山家はいない。地形を確かめ、正しい道程を把握し、ただ足もとを見て、小幅でゆっくり山道を登る。雨や霧に出合っても挫けない。ひたすら歩む。そのうちに頂上が眼前に立ちふさがる。同じように、さとりは求めて得られるのではなく、修行中に自然に現れるという。

田上太秀・駒澤大名教授

2017.7.4 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.594

たとい耳を覆い、眼を閉ざして、この毒焰を避けられても、行雲流水、墜葉飛花をいかにして止められようか。
（『息耕録開筵普説』）
△解説▽趣旨は、雲や水の流れ、草花が枯れて散り、万象がすべて千変万化するのを止めることはできないということ。たとえ煩惱をなくした安楽の身心を得ても、無常の風にさらされる。釈迦でさえ死を避けられなかった。この道理は避けられないと知るべきである。

田上太秀・駒澤大名教授

2017.7.3 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心

No.597

悪しよ小なるをもってこれを為なすなか
れ。善小なるより為なさざるなかれ。
〔『三國志』〕

△解説▽これくらいならと言って
小悪事を重ねると、一滴ずつの水が
滴ると水瓶を満たすように、大きな
報いを受ける。たとえ小さな善事でも
繰り返して行えば、よい報いが積み
重なり、楽しみが増える。善行はな
しがたいが、悪行はしやすい。釈迦
は善をなすのを急ぎ、悪から心を退
けよと言った。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.7.6 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.596

修証しゆじやう一等

△解説▽これは修行とさとりは、
本来、別のものではないという意味。
道を極めた達人・名人と呼ばれた人
で、極めた後で修行・修業を怠けた人
はいない。達してもなお精進して
いる。怠けると得た技や力が衰える。
彼はさらにすぐれた極みを得るため
に精進している。凡人はさとの後
は修行しなくてもよいと考えるが、
達人・名人はさとりでも修行の手綱
をゆるめない。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.7.5 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.599

病癒ゆれば、多く慎みを忘れる。す
べからく安楽にもつねに病苦の時を思
うべし。
〔貝原益軒〕

△解説▽これに似た「喉元すざれば
熱さを忘れる」がある。つまり恩
義を忘れることを戒めた言葉。この
文の前に「人は富裕になると貧乏だ
った頃を忘れ、出世すると旧友を忘
れ、成長すると父母の恩を忘れる」
（趣意）とある。つまり人は健康体
が常で、病体は偶然と思うところが
ある。体は己のものとおごってはな
らない。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.7.8 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.598

足るを知れば辱められず、止どまる
を知れば殆おぼうからず。もって長久なる
べし。
〔『老子』〕

△解説▽「満足することを知れば
辱めをうけない。よい加減を知れば
危険な目に遭うことはない。これが
長寿の秘訣である」というほどの意
味。足ること、偏らないことを心が
けたら、日常生活の万事で争いはな
くなる。争わないと心にストレスが
たまらず、長生きできるという。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.7.7 中村元記念館協力